# 山中伸弥教授「万博プレゼン」

朝日新聞 6 月 8 日朝刊から。2025 年万博の開催地を巡り、13 日にパリで開かれる博覧会国際事務局(BIE)の総会で、京都大学 iPS 細胞研究所長の山中伸弥教授(55)が日本の大阪万博構想をプレゼンテーションする。世界で初めて iPS 細胞を作製し、ノーベル医学生理学賞を受賞した山中教授の高い知名度を生かし、日本での開催に幅広い支持を得たい考えだ。‥‥　25 年大阪万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。健康で豊かに生きる新たな方法を探る「実験場」と位置づける。日本の優れた医療技術や健康への取り組みを示し、開催地としてふさわしいことをアピールする見通しだ。

翌 9 日朝刊「大阪万博を再び 熱視線」と題した特集で、山中教授が万博への思いを語っている。「健康寿命でみると関西は短い方です。日本の中でも特に課題に直面する関西で万博を開き、光り輝ける方法を見せるのは意義があると思います。その方法を見せる際に、科学も役に立つはずです。‥‥‥私がそうだったように、70 年万博でその後の人生に影響を受けた人はすごく多いはず。25 年万博が大阪で開かれたら、絶対そういう場になると思いたいです。」

山中教授は 70 年の大阪万博のときは 8 歳だったという。私は大学 4 年のときであり、信州松本から夜行列車で大阪に来て、大行列に驚いたことを覚えている。大阪万博への「思い」は、人それぞれだろう。山中教授の個人的な過去への郷愁、自分たちの研究成果を世界に発信する場として、万博を大阪に誘致したいという「思い」は、わからなくはない。だが、大きな疑問も感じざるをえない。

高度成長真っ盛りの 1970 年の大阪万博から、半世紀近い時間が流れた。万博という国家イベントも、当然ながら変化してきている。レポートでも紹介したが、社会学者の吉見俊哉教授は「愛知万博は、大阪万博に始まった戦後日本における万博開催の長期的ブームの最後を飾るイベントであるのみか、およそ日本で開催される最後の万国博覧会となるかもしれないのである」と指摘している。迷走を続けた愛知万博を長年追いかけた私にとって、大阪でふたたび万博を誘致するとは「ありえない話」であった。それも山中教授のような著名な科学者が、「外務省の万博誘致特使」とは信じられなかった。

山中教授に問いたい。あなたは大阪万博の会場予定地が、どんな場所であり、そこで何が計画されているのか知っていますか。会場予定地は夢洲というゴミの最終処分地であり、健康や災害のリスクが懸念されている。そこは「IR」という名のカジノ＝賭博場建設が計画され、万博を起爆剤にするという。こんなところが「健康で豊かに生きる」実験場になるのだろうか。ぜひ、山中教授のご意見を聞かせてもらいたい。

（2018 年 6 月 13 日）